

## 老後破産 長寿という悪夢



年金暮らしを始めた2014年9月、NHKスペシャル『老人漂流社会～“老後破産”の現実～』を観たが、なんだか先行きに不安を覚えた。写真の新潮文庫を読み、その思いを強くした。序章の冒頭だけ紹介したい。

今、超高齢社会を迎えた日本で「老後破産」ともいえる現象が広がっている。年金で暮らしていた高齢者が病気やケガなど、誰にも起こり得る日常生活のささいな出来事がきっかけとなり、自分の収入だけでは暮らしていけずに破たんしてしまうケースが相次いでいるのだ。「お金がなくて、病院に行くことをガマンしている」「年金暮らしなので、食事は1日1回。1食100円で切り詰めている」

なぜ、こうした事態が広がっているのか—その背景には、世帯あたりの収入が過去20年近く減り続けている状況がある。働く世代の年収も下がり続けているが、高齢者ひとり当たりの年金収入も減り続けている。さらに、拍車をかけているのが「単身化」、ひとり暮らしの高齢者が600万人を超える勢いで急増していることだ。夫婦で暮らしていれば、2人分の年金を合算して生活を維持することができていても、いずれかが亡くなれば、ひとり分の年金で暮らしていかななくてはならない。

しかし、ひとり暮らしの年金収入を分析したところ、およそ半数、すなわち300万人近くが生活保護水準を下回る120万円未満であることが分かってきたのだ。すでに生活保護を受けている70万人余を除く、200万人余の中には、年金収入だけで暮らしていくのはギリギリという人も少なくない。収入を月額に換算すれば10万円未満、国民年金(6万5千円程)に加えて厚生年金をもらっているサラリーマンも含まれる。多くの人たちは10数万円の年金をもらっていれば、それほど大変な事態に直面するとは思ってもいないだろう。しかし、10数万円の年金に加えて自宅を所有していて、ある程度の預貯金がある人でも、ジワジワと追いつめられ、「老後破産」に陥ってしまうケースが少なくないことが取材で分かってきたのだ。「こんな老後を予想できなかった」私たちが取材した多くの高齢者は、「老後破産」に陥ってしまうことなど、あり得ないと思って暮らしてきた人たちだ。サラリーマン、農家、自営業……それぞれ老後に備えてきたつもりの人たちが「まさか自分が『老後破産』するなんて」と呆然と話していた。

「老後破産」のきっかけとなるのは、病気やケガなど、高齢になれば誰にでも起こり得る事態だ。とりわけひとり暮らしで支えてくれる家族がいない場合、医療費や介護費用は重い負担となる。まだ身体の無理がきくうちには、できるだけ我慢して病院へ行かなかったとしても、いずれ重症化したり、寝たきりになったりして、訪問介護や医療を受けなければ暮らしていけなくなる。その費用を自力で負担できない場合、生活保護を受けることになる。そうした追いつめられた状況にありながら、年金だけでギリギリの生活を続けている状況を「老後破産」と位置づけたのだ。

(2018年4月11日)